

共食という文化

原田 信男

みなさん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました、原田と申します。食のなかでジェンダーの問題はなかなか扱いにくいのですが、きょうは女性歴史文化研究所のシンポジウムですから、「共食」というテーマを取り上げると、家族の問題とも絡みますので、ジェンダーとも少し関係してくるかと思って、このテーマを選びました。

まず、われわれは食べて生きています。食事をしないと死んでしまいます。そこで、人間は食とどう関係にあるのかという、少し理論的なところから入っていきたいと思います。

なぜ人間は食べるのか、何のために食べるのか、といえば、当然、生きていくためです。生きるとはどういうことかと申しますと、私なら私の身体が存在することが最も重要でありまして、そして、その体が動かなければ意味がない。もちろん、心臓が動いています、もう少し細かく分析していくと、まず私たちの体をつくっている細胞を維

持するという目的がひとつあります。

もうひとつの目的の「体が動く」というのは、基本的にはひとつひとつの細胞内の比重を熱量によって変えることで膨張させたり収縮させたりしています。このため、手や足などが動くわけで、それをわれわれは無意識のうちにやっているわけです。

したがって、身体・細胞の維持とその細胞を動かすこと、この二つがわれわれが生きていくために必要だということになります。そして、細胞の維持のために必要なのはたんぱく質です。必須アミノ酸がないと、私たちの細胞は再生しない。われわれ身体の細胞は一日二週間で入れ代わり、老廃物が出て行って、新しい細胞が自分の体に合ったかたちで再生される。その設計図がDNAです。こうした細胞の再生を繰り返し続けるためには、たんぱく質が必要です。

また、体を動かすためには、細胞を温めなければなりません。細胞を温めるためには、カロリーつまり熱量が必要になります。これによ

って動くと言うことが可能となるのです。もちろん栄養素といっても、たんぱく質とカロリーは次元の違うカテゴリーですが、われわれはたんぱく質とカロリーを必要として生きているわけですよ。

そして、おもしろいことに、われわれの体に必要なたんぱく質とカロリーを、われわれの体はおいしく感じるようにできています。したがって、肉や魚、ごはんに含まれるたんぱく質をおいしく感じていますし、カロリーという点では、糖分と脂質をおいしく感じるようになってきています。結局、味覚と食べものとの関係は、人間の存在にとって最も根本的なところに関わっているといえます。

もうひとつの問題は、どうやって食べるのかということです。私にとっての大先生である石毛直道先生は、「人間は料理をする動物である」という定義と、「人間は共食をする動物である」という定義を唱えられました。逆にいえば、人間以外は料理をしないし、共食もしないということになります。人間の食行動において、料理をするという問題と共食をするという問題は非常に特徴的かつ重要な問題であるわけですよ。

共食は、「共同飲食」の略です。たとえば男女が、出会って、仲良くなつて、デートをすると、必ず食事をしますね。その場で一緒に食事をする事によって、その男女間の距離が非常に近く感じられるようになり、それを永遠のものとするときの結婚式では三三九度というかたちで、一緒にお酒を飲み干すことによって二人が一緒に暮らしていくという誓約をします。そういう儀式的なには共食という

問題が入り込んできており、まさに共食によって人と人との紐帯を共有することになります。親密さを象徴し、さらに結婚式などの誓約という問題にも関わっていく場合に、共食という行動がとられることになり、

ここで人間とはどういう存在かという問題を考えてみますと、人間は、動物一般のなかでは身体的運動能力のきわめて低い動物です。駆けっこをしても犬のほうが速く走りますし、「馬力」という言葉があります。人間の力は馬の力にとっても及びません。そう考えると、人間は、動物のなかでは身体的運動能力はきわめて低いことになります。

しかし、その人間が、なぜ今日、地球上の食物連鎖の頂点に存在しているのかといえば、それは人間がきわめて文化的な存在であるということです。サルに文化があるかどうかはややこしい問題ですが、ともかく人間には文化という強い力があります。

文化とは、後天的に学習した知識と技術です。本能ではなく後から学習したものですから、たとえば食文化であるとか、寝ることが文化であるというのは、食文化であることや寝ることが本能から先天的なものです。どのように眠るか、何を着て眠るか、どこで眠るか文化だということです。同様に、食文化、どうやって食べるか、食文化だということです。振る舞いの文化、というものは後天的に学習したものですから、これも文化なのです。

その文化を共有する母体として、集団が存在します。つまり人間は、この世界での生存戦略として、集団で生きていくという戦略を選んだ

のです。もともと人間は個々には、身体的運動能力のきわめて低い、弱い存在ですが、その弱い存在である一人ひとりの人間が集団となつて動くことによつて、非常に大きな動物も捕獲できるのです。そのために人間は、集団で生きていくという生存戦略を選択したことになります。

そして、集団で文化的に生きていくために何が一番有効かというところ、それは言語・言葉なのです。言葉によつて集団的な行動の計画性のよくなるものが確保され、これによつて最大のたんばく質の提供源である他の動物も獲ることができません。つまり狩猟という食糧の獲得が約束されるわけで、集団行動によつて人間が自分よりも大きく強く速い動物を獲るという優位性を獲得したことになります。

したがって、人間というのは集団で生きていくわけですが、われわれは必ず複数の集団に属して、その集団の最小単位が家族です。男と女が、その子どもを産み、家族として生きていくというのが最低の集団単位です。しかし、それはあくまでも消費の場であり、食糧を獲得するという生産の問題になると、また別の組織が必要です。

たとえば狩猟集団は、動物を獲るわけですが、まさに集団行動によつて動物を獲ることが可能になり、その狩猟集団の一員に属することによつて配分を得て、それを家族で食べることで家族という集団を維持していきます。私も家族があり、なおかつ学校に勤めて、そこでお金を稼いできて、それで食糧を買つて、家族を養っています。その関係とまったく同じです。その意味で、人間は複数の集団のなかで生

活する存在だということになります。

では次に、なぜ家族が重要で、なおかつ、それが共食という問題と絡んでくるのかということですが、人間を含む哺乳類の生存戦略を考えると、胎生、つまり、おなかから赤ちゃんを産むということがあります。それ以前の卵生の世界は、とにかく数をたくさん産んで、そのうちの何割かが生き残つてくれれば自分たちの種が維持できる。最初は、この卵生の原則が生物としてのひとつの生存戦略でしたが、それから一歩進んで哺乳類になつた段階で、そうではなく、数は少ないけれども身ごもつた子どもをきちんと育てていこうという戦略に切り換えました。

そうなりますと、哺乳類はどうしても子どもが自立するまでは親が食事の面倒をみなければならぬことになります。したがって、哺乳類は、まさに乳によつて子どもを育てますし、人間以外の場合は、母乳状の食事は、個体単位でその場で消費します。ということは、母乳をどんどん飲んで、一定の段階まで育ったら、あとは自分で食糧を探してきて、それを見つけたら、その場で食べてしまうという生存のパターンになっていきます。

しかし、人間は、文化・言語とともに、もうひとつ他の動物と異なることがあつて、二足歩行ができました。二足歩行の最大のメリットは、手を自由に使えるということです。これによつていろいろな技術を発達させるとともに、手を使って物を運ぶことが可能になりました。ですから、集団で獲得した食糧を、自分の家族のもとへ持ち帰り、そ

れを家族で分配して食べることが可能な生物だったので。

家族という集団のなかで、食糧の獲得と分配という問題があり、男性は狩猟、女性は採集その他という家族内の分業体制になっていき、いわゆる性的分業が成立しますが、これは人間が集団で生きていくという生存スタイルを採ったごく初期の段階からあったのです。

もちろん、類人猿も食物の分配はするようですが、京都大学総長の山極寿一さんのお話によりますと、類人猿は物乞いがあったときだけ与えるそうです。人間は、物乞いがあるとなかろうと、集団としての家族を維持するために食糧を持ってきて、それらを分配することになります。

もうひとつの命題である、人間は料理をする動物であるという点では、食糧はそのまま食べるのではなく調理することになります。調理は火を使ったりしますが、食べるたびに何度もその場で調理することはできませんから、獲ってきた食糧を家族単位で調理して、みんなで食べます。そこに食事の共時性が生まれ、そこから共食という問題が発展することになると思います。

ここで、共に食べるということの根本にあつた狩猟の問題を少し考えてみたいと思います。狩猟の人びとは集団で平等の分配をするというのは、私も頭の中ではわかっていました。しかし、それが実際にどういふものかを九州の八代の久連子というところで初めて見ました。宮崎県の霜月神楽に行った帰りでしたが、たまたま三人の猟師さんが

一頭のイノシシを獲りました。それを解体するのですが、まず内臓はいちばん腐りやすいので、すぐに村のおかみさんたちに渡してしまいます。おかみさんたちは、それで鍋をつくって、村のみんなで食べます。精肉の部分が、猟師さんたちの取り分になります。

それを見ていて「なるほど」と思ったのですが、部位によって肉の価値が違いますから、平等に分けるというのは、簡単そうで非常に難しいのです。まず肩、腹、お尻の部分を三つに割り、さらにそれを三つに切り、各部位ごとに一つずつ、三つの白い袋に入れます。目分量で切りますから、当然、量の多少はありますが、彼らはその白い袋を一つずつ持つて帰るといふかたちで平等に分けていました。

彼らがイノシシを仕留めた道具は、鉄砲ではなくヤリです。犬と一緒に追い詰めて、ヤリでブスツと刺したのですが、そのとき最初にヤリを刺した人には、一番ヤリとしての特典があります。それはイノシシの頭です。ですから、獲った人は、うれしそうに頭を叩いて割って、そのなかから脳みそを取り出して、その脳みそを洗って持ち帰りまして。そして食べられないイノシシの鼻は、犬にごほうびとしてあげていました。そういうかたちで平等に分配するのです。

なぜ平等に分配するのかと申しますと、たまたま久連子の場合には三人の猟師さんでしたが、基本的に狩猟の集団はもつと大がかりな人数です。そのときに、マガギの人びとは鉄砲でクマ、シカ、イノシシなどを狙って撃ちますが、その場合も、基本的にまったく平等に分けます。獲った人に一番多く渡したらいいじゃないかと考えがちですが、

彼らは絶対にそうしません。

なぜなら、いかに鉄砲のうまい人であっても、年をとれば反応も鈍くなるし、目も見えなくなる。いまは花形の射撃手であっても、やがて老いていけば、できなくなる。しかし、その集団に属している限り、同じような分け前にあずかることができる。つまり、その集団・組織を永続的に維持するためには、平等に分けることが最も合理的なやり方なのです。

したがって、まだ一七〜一八歳の、メンバーになりたてで、ただ単に声をかけて動物を追い込むだけの人も、鉄砲で撃った人も、まったく平等に分ける。そして、その平等に分けた分を家族に持って帰り、家族とともに食事をする。そういうありようが、人間の集団的な食糧獲得の最初の形態である狩猟という文化のなかにみられるのです。

そうやって持ち帰った食糧を、家長は家族に分配する義務があります。分配するためには、味覚を確認しておかなければなりません。そして、分配された食糧を同じ時間に調理して食べれば、家族はまったく同じ味のものを食べることになり、さらに集団としての独自性のよくなものが継承されます。そのときに、この食べものはどううまいとか、どういう歯ごたえだとか、そういうことを話し合うわけで、その意味では、味覚も集団によって形成されます。

したがって、集団の特質は味覚体験の共通性であり、これが今日のいわゆる「わが家の味」「おふくろの味」につながってきます。ですから、共食というのは、同じ味をとにもすることによって、集団とし

ての結びつきを強める役割があります。

あらためて共食の意味を考えてみますと、先ほどデートの話をしました。人間関係における親密さの表現ということが共食の基本的な意味でして、日本語のことわざにも「同じ釜の飯を食った仲間」という言い方があります。これもまさに共食における人間関係の社会的親密性を示す言葉でして、人間と人間との距離を、どれだけ一緒に食事をするのかという共食の尺度で測ることができそうです。

つまり、共食の意味というのは、食の味覚を共有することになりますが、同じ時間、同じ場所、同じような食べものを共有することによって、親密さを増していくわけです。

また、冒頭にも申しましたように、共食は誓約と確認の場でもあります。結婚式における三三九度もそうですし、その後、親族を招いて行う披露宴は「これで一族になった」とか「二人の結婚を認めたい」ということを、まさに食事をしながら承認する場になります。

これがキリスト教ですと、ウェディングケーキを共食することになります。さらにミサのときに神父さんが信者に白いパンを配ります。いまはワインと一緒に飲みませんが、昔は必ず、ミサのときにワインを飲んで、パンを食べました。それが、神との誓約の場、つまり神との共食の場になるわけですし、キリスト教のミサにおけるワインはキリストの血の代わりであり、パンはキリストの体に見立てられます。それを信者たちが一緒に口にすることによって一種の共食行為を行い、

神との誓約を行っているのです。

日本の歴史においては、古代の史料に「共食者」という役職が出てきます。「共食者(あえたげびと)」といって、日本書紀の雄略天皇の条に、「呉の国の人 came ときに共食者に○○(人名)を置け」というのが出てきます。つまり、外国から使者が来た場合、言葉がわかりませんから、まず一緒に食事をする事によって気持ちを通わせ合い、そのうえで具体的な外交儀礼などの交渉に入っていきます。まったく見知らぬ国の人びとが来れば、まずは共食者に任命された人が一緒に食事をするわけで、雄略天皇のときは呉の人、推古天皇のときは新羅の人と食事を一緒にしています。

そして、これが延喜式という古代律令の施行細則のなかに、「蕃客来臨のときには共食二人」というかたちで、使者に対して人間を使うことが書かれています。古代の国家制度のひとつとして共食者を置き、外国の人が来たらず共食をするシステムがあつたことがわかります。

さらに他の史料で古代を見っていきますと、継体天皇二十一年のとき、筑紫国造磐井の乱で磐井を鎮圧したのは近江毛野という人物でしたが、じつは磐井の反乱を起こした人物と近江毛野は昔からの仲間で、「これから自分は鎮圧に行くが、その相手は昔、同じ釜の飯を食った仲間で、友だちだった」というようなことが書かれています。そういうかたちで同じ場所で共食をすることが、古代においても重要な意味を持

つたわけです。

これが神話の話になっていきますと、イザナギとイザナミが日本の国を産んだわけですが、イザナミは黄泉国(死の国)へ行つてしまします。それをイザナギが黄泉国まで訪ねて行って、なんとか連れ戻そうとしますが、そのときすでにイザナミは黄泉戸喫(よもつへぐい)死者の国の食べものを食べることをしてしまつた。そのために、もう元の世界には帰ることができない、という話が出てきます。死者と共食した人は、もう生者とは共食できない。そう考えていたことが、この古事記の神話からもわかるわけで、日本の古代においても、かなり古い段階から共食が持つ意味は大きかつたといえると思います。

次に考えてみたいのは、神人共食という問題です。神様と人間が共に食べるということも行われていました。われわれは神様を呼んで、いろいろお願いしますが、神を呼ぶための装置があつて、まず竹や木を四本立てて、そこに注連縄を張り、食べものを供えます。これはどういう意味を持つかという点、四本の柱は依代といって、神様が降りて来る場所です。したがって、この四本の柱は神の住居であることを示します。そして、注連縄に吊る御幣は、いわば神様の着物です。

住居があつて、着物があれば、もうひとつ重要なのは食べものです。その食べものを机に供えて、神を呼び、お祈りをします。これはいまだに地鎮祭というかたちで執り行われ、神様に来てもらつて、この土地に地震や火災などの災いが起きないようにお願いをします。

これはあくまでも臨時に神を呼ぶ装置ですが、恒常的に「いつもここに来てください」というかたちで設けたのが神社です。したがって、神社に行けば神様がいるのではなくて、特定の神様に「この神社に降りてきてください」とお願いするために、神社をつくるようになったのです。そして神が来たときには、食べものを供えなければいけないことになります。

では神人共食とは何かということですが、日本の神道で神主さんが儀式をやるとき、儀式を始める宣言が終わると、献饌(神様の食べものを供える)をします。そこに神様が降りてくると、献饌の後で神主さんが祝詞を読みます。祝詞は、基本的には願いごとです。結婚式であれば、「○○村のAと○○村のBが、ここで一緒になって、この二人に末永く幸せがありますようにお願いいたします」というような願いごとをして、それが終わると撤饌といって、神饌を下げてしまいます。

これで神事が終わるわけで、じつに簡単な構造ですが、献饌と撤饌の間は神様が降りてくるところに食べものが供えられていますから、この神事の中に神様は捧げられている神饌を食べているとみなすわけです。

神社での神事が終わりますと、必ずその後には直会がついてきます。われわれから見ると、直会は、神事が終わって、願いごとが済んだから、打ち上げで一杯やって、飲み食いする楽しみの場ではないかと思われがちですが、じつはそうではなくて、神事のなかで非常に重要な意味を持ちます。つまり、神事で神様が神饌を食べた後、その神饌を人間側が食べるのが、直会の本来の意味なのです。ここで神と人の

共食が成立し、神人共食という概念が成立します。これによって神様と人間が仲良くなり、心がつながる。心がつながるから、人間の願いごとを神様がかなえてくれるであろうということです。神饌は、一種のお礼でもあります。捧げればよいというものではなくて、その捧げたものを後で人間側がいただくことによって、神と共食します。その意味で、直会が非常に重要な意味を持っているのです。

神社の神饌をもらいになったことがあるかと思いますが、最近の神事では、神饌と一緒に食べるというイメージが湧かないかと思えます。これには近代の歴史的な問題があります。まず神饌には生饌と熟饌があり、生饌は生の食べもの、熟饌は調理した食べものです。現在では生饌が原則になっておりまして、神様に捧げるときには調理をしない、そのままの魚や野菜などを捧げています。

ところが、いつ、これが始まったかというところ、昔からなかったわけではありませんが、とくに明治初年に国家神道というかたちで、神道を国教にしましたから、その段階で神社庁が神式の統一を図り、神式の細かなやり方を決めました。このときに、なぜか生饌を原則にしてしまったのです。したがって、いま神社でやる神饌そのものに調理された熟饌が出る例は非常に少なくなっています。昔は熟饌が当たり前でした。

つまり、人間の手で食べられる状態にしたものを、神様に捧げて、神様に食べてもらい、その儀式が終わると、それを人間が食べるというのが基本ですから、昔は熟饌が本流だったのです。それによって、

まさに神人共食が成立し、願いごとをかなえてもらうということになるのです。

これが別のかたちで言葉としても残っているのが、正月の餅直会です。九州には餅直会という言葉が残っていますが、正月、神棚に鏡餅を捧げておき、松が明けるとその鏡餅を下げて、それを人間が雑煮にして食べます。そうすると、正月の七日間に神様が食べた餅を、今度は人間が食べることになり、この神人共食によって、その年一年間の家族の安全や豊作という願いがかなう可能性が高くなるということ、神様に捧げた餅を一定期間が過ぎたら人間が食べるという餅直会をいまでもやっているのです。これも神人共食の一種でして、そういう行為によって人間と神の距離が縮まることになります。

これをもう少し広い場面で見ていきますと、われわれ日本人の農耕のお祭は春祭と秋祭です。言うまでもなく、日本は農耕民族のなかでもコメを非常に重要な作物としてきましたから、コメをつくり始める前の春の祝祭と秋の収穫祭が日本で最大のお祭となるのです。

じつは春の祝祭は、いまは花見とかたちで残っています。農村では、桜の花が満開になる頃、田起こしをして水田の準備に入りますが、農民たちはその頃、近くの山に登って、山桜を見ながら自分たちの村や田んぼを見下ろしました。見るということは、霊力が伝わるということですから、山の上での宴会で神に祈りを捧げて、自分たちの村を見ながら食べることによって、今年も村の田んぼにたくさんコメが実りますようにという一種の予祝をおこなったのです。

また、見るという行為は、「国見峠」という地名にも出てきます。国見峠という地名は、支配者がその国を見ることによって、その視界に入った地域はその支配者の権力によって平和が維持されるということから来ています。したがって、見るというのは、もともと花見という予祝の行為としてあったであろうと考えられます。

ただ、この予祝は春に行われますが、基本的に一年の始まりの春は一月です。そうすると、たしかに田植えは現在の暦でいえば四月から始まりますが、年の初めが重要だということで、先に正月に「今年一年たくさん収穫できますように」とお祈りするかたちに徐々に変わっていききました。

たとえば山形県では、雪中田植えといって、正月のまだ雪の降っているときに田植えのしぐさをします。それによって、「今年もたくさんとれますように」というお祭をして、その後は直会のようなかたちで神に捧げたものを食べて、豊作を予祝します。

秋になって、たくさん収穫できると、それを神様に感謝して、初穂を捧げて、「来年もまたよろしく願います」という感謝祭としての収穫祭を行います。これがいわゆる村の鎮守の秋祭りというもので、もちろん共食は伴いますが、だいたいどこでも収穫が終わった頃に村の神社の祭が行われます。

日本でのコメの司祭者のトップは天皇です。それを最も象徴する新嘗祭は、十一月二十三日に行われます。この日は、現在は勤劳感謝の日となっていますが、昔は新嘗祭の日とされてきました。いまでも、

この日は天皇が新嘗祭というお祭をやつて、神様に神饌を捧げます。

そして、四月か五月頃になりますと、「きよう、天皇陛下は皇居の田んぼで田植えをしました」という記事が載り、九月か十月になると「きよう、天皇陛下は皇居の田んぼで稲刈りをしました」という記事が載ります。こうして天皇が皇居の田んぼで刈った稲からつくった白酒・黒酒とお餅を、新嘗祭で神様に捧げます。それを下げてきて、天皇が食べることによつて、神と天皇が一体化し、天皇が治める日本の国に神の霊力がばらまかれる。霊力がばらまかれるというのは、つまり豊作になるということです。

また、祈念祭は天皇が行う予祝祭ですが、これも旧正月の二月に豊稷を祈る祭りとして行われます。ですから、これも年の初めに行われるのです。

なぜ収穫祭が十一月二十三日なのかと申しますと、雲南のミャオ族も水田稲作をおこなっている民族ですが、彼らも十一月の二回目の卯の日に収穫祭をやります。年に十二支があるように、日にも十二支がありますから、二回目の卯の日はだいたい二十四日頃になります。明治になったとき、第二卯の日というのをやめて、十一月二十三日を新嘗祭の日としてしまいました。

したがって、天皇はこの日に収穫祭としての新嘗祭をやっているのですが、そうすると実際の収穫から一カ月空いてしまいます。なぜかという、植物が実ったということは、植物の生命が一度死んだことになります。穀霊がいったん死にますから、その死んだ魂を慰めなけ

ればいけないということで、物忌みの月として十月の一月間が充てられるのです。そして、ひと月おいた十一月の二回目の卯の日にあらためて収穫祭をおこなつて、そこで豊作を感謝し、来年の豊作を祈ります。このズレは民間の霜月神楽も同じであつて、わざと十月を一月間、空けるのです。

また、ご承知のように、十月は神無月です。神様が出雲に集まりますが、ともかく十月という物忌みの月を避けて、十一月に天皇は神と共食をして、新嘗祭として豊作を感謝し、来年の豊作を祈るということをやっているのです。

この天皇の新嘗祭を大がかりにしたのが大嘗祭で、新しい天皇がいちばん最初にやる新嘗祭を大嘗祭といいます。これは天皇の交代儀式の一種であり、かなり大々的に行われ、皇居の水田で刈った稲ではなく、悠紀国と主基国からの稲を捧げます。

悠紀国は東日本、主基国は西日本の国ですが、厳密には悠紀国と主基国の指定された悠紀田・主基田という田んぼでとれたコメを献上して、白酒・黒酒をつくり、お餅をつくつて、天皇が神に捧げるといふ非常に大がかりな行事です。これが大嘗祭として、天皇が交代するたびに行われます。

ところで今上天皇は生前退位されますので、いまの皇太子が天皇になるとときには大嘗祭が行われます。そもそも昭和天皇のときには、一月七日に亡くなられて、その年には大嘗祭は行いませんでした。その年は一年間、物忌みとして休むのです。そして、その翌年の平成二年

に天皇の大嘗祭が行われて、そこに今上天皇が世界からお客さんと呼ばれて、「私が新しい天皇です」という披露パーティーをやりました。そのときも、天皇は神と一緒に食事をするという儀式をしています。新嘗祭は、宮中の神嘉殿で行われますが、大嘗祭のときは皇居に大嘗宮という神社を造ります。その大嘗宮で、天皇は神と共同飲食(神人共食)をします。

とくに日本の場合、コメ文化が中心ですから、コメと、そこから造った酒と餅を神饌として神に捧げます。ただ、天皇というと、いかにもコメの司祭者であることに間違いありませんが、実際にはアワ・ヒエも一緒に神様に捧げて、食べています。つまり、農耕全般にわたって、水田も畑も、両方の作物とも神様に捧げて、それを神と共食することが、現在でも国の象徴である天皇の仕事として行われているのだ、ということをご理解いただければと思います。

神饌はコメと餅と酒でして、先ほども申しましたように、明治時代に神社本庁が神道の統一をはかったときにはほとんどそうしてしまいました。ところが実際には地方にも伝統的な大きな神社がいくつかあって、昔からその土地でとれた物、その土地の産物を神様に捧げています。さすがに神社本庁も、地方の大きな神社の神饌の内容まで変えることはできなくて、いまもいくつか残っています。

たとえば諏訪大社は、上社と下社に分かれています、上社が狩猟の神様、下社が水田稲作の神様で、上社ではシカの首が捧げられます。これは、さすがに生々しいので、現在は剝製を使っていますが、江戸

時代までは首を切ったままのシカを捧げていました。

それを同じようにやっているのが、先ほどの狩師さんを見にいった椎葉の神楽ですが、切ったばかりの血が流れるイノシシの首を神様に捧げます。椎葉は、山の中で、狩猟が重要ですから、イノシシをお礼として神様に捧げるわけで、諏訪大社も同じでした。

香取神宮も、もともとは狩猟・漁撈ですから、サケの皮を細く切ったものや鳥を神様に捧げ、それを神とともに共食しています。椎葉の神楽のときも、一昼夜かけて神楽が舞われますが、その次の日にはイノシシの頭を雑炊にして食べます。私たちも見学に行きましたが、そうやって食べさせてくれました。そういうかたちで神に捧げたものを人間が食べるということは、現在も行われています。

このような特殊神饌は、地方の大きな神社に残りましたが、本来は天皇の力が及ぶようになってからコメ中心に変わりました。しかし、基本的にはその土地の狩猟の獲物などをその土地の神に捧げることが今日までずっと続いて行われていることになりました。

他の角度から共食の問題を考えてみますと、先ほど古代の話をしました。が、中世に「一味」という言葉が成立します。いまでも時代劇などで「あの悪党一味が云々」というふうに使いますが、あの「一味」というのは、まさに同じ味を味わった人びとという意味です。「一味同心」という言葉がありまして、一つの味を味わった者は同じ心を持つという一種の誓約の儀礼ですから、「一味」という言葉は、じつは共同飲食から来ています。

そして、一味同心を確認するために、一味神水という儀式を行います。これは神の水を一つの味として一同で味わう行為です。記録ではどのように出てくるかという点、熊野の牛王宝印を押し紙の表に「われわれは、これから一緒に行動を起こす。この行動に関しては神からも裏切られずに目的を遂行する」という起請文を書いて、名前を書き連ね、それを神社の前に持って行って焼きます。焼いてできた灰を、その神社の水の中に入れて、その水を灰ごと全員で回し飲みします。一味同心になって、一味神水の儀式をすることによって、「われわれはこの仲間を裏切らない」という誓約の儀式を行うわけで、人びともしこれに違反すると神罰が当たると考えました。

『源平盛衰記』のなかにも、加賀の僧兵が加賀の白山神社の前で起請文を焼いて、一味神水の儀式をおこなって、比叡山に強訴に行ったという記述が出てきます。比叡山に強訴に行くことは、下手をすると比叡山の僧兵とぶつかって戦闘になる可能性がありますから、そういう場合でも裏切り者が出ないようにということで、こうした儀式をおこなったのです。

一味神水は誓約の意味を持つと言いましたが、私はもともと中世の村落史が専門でして、その頃に見ていた古文書のなかに、荘園の土地の広さを測る大検注が出てきます。これは近世でいうところの「検地」で、「この土地は誰の土地で、誰が耕していて、その者が年貢の責任者になって、この面積に対する年貢をきちんと納めなければいけない」という丈量作業を行います。この大検注を行うときにも一味

神水をやっていきます。

というのは、土地の丈量は非常に重要で、それがもたなくなって年貢が全部決まりますから、その場でうそをついてはいけません。だから、一味神水を行うことによって、「私はこれだけの土地を耕していますから、これだけ年貢を納めます」ということを神に誓うのです。このように、共食の延長である一味神水は、いろいろなかたちでやっていきます。

近江の古文書調査でも、近世初頭のものに、上のほうの村から来て耕作しているところと下のほうの村からも来て耕作しているところがバッティングしてしまって、出入りの争いになるという話が出てきました。当然、それは解決しなければなりませんから、調停役が入って解決しますが、その後はやはり一味神水をして、問題になったところの前で神水を一緒に飲み、「今後そういうことが間違いないように」ということをやっていきます。

また、近世文学の大家からは、遊女と客が契りを結んだときにも一味神水をやるという話を聞いたことがあります。そういうかたちで、中世の一味神水の名残は近世の江戸時代まで続いていたこともわかっています。

共食は、身分の問題とも関係してきます。とくに中世社会は、身分制の厳しい社会でしたから、共食と身分が非常に密接に絡まっています。共食を行うというのは、集団的な同一性を確認する場ですから、ある儀式で食事をすれば、その食事をした全体が一つの集団として認

識されます。その意味では、儀式の料理に必ず共通する献立が入ってきますが、身分制社会ですから、上の身分の者も下の身分の者もまったく同じものが食べられるわけではなくて、献立がかなり異なります。しかし、ある意味では同じものを食べる。同じものを食べて、集団としては同じだけれども、献立の数が違うことによって自分の身分を確認する。そういうことが行われているのです。

したがって、共食による紐帯と身分による格差を確認する場所として、身分制社会における共食の儀式があつて、それは大饗献立と本膳献立にみることができます。なかでも大饗料理は、平安時代の貴族の代表的な料理のスタイルですが、それが出てくるのが芥川龍之介の『薯蕷粥』という『今昔物語集』から採った小説です。貴族の大臣の屋敷で大饗が行われると、「下し物」といって、必ず料理のお下がりが出てきます。そのお下がりである薯蕷粥を食べ、貴族に仕えているある武士が「こんなうまいものは初めてだ。もつと食べたい」と言うと、敦賀の武士が「食いたくないなら、おれのところへ来い」と言つて、連れていって、薯蕷粥をたらふく食わせたという小説ですが、その発端は大饗でした。

たとえば永久四（一一六〇年）の藤原忠通がおこなつた大饗があります。藤原の貴族による大饗は、大臣になつたときや正月に、いまだいえば内閣の高級官僚クラスが行う儀式で、主客に天皇の親族を招きます。そのなかで最も身分の高い人から低い人まで、料理のランクが四つのクラスに分かれますが、カニなど一―二品は必ず同じものを食べます。部分的に一―二つぐらひは同じ献立を食べることによって、集

団としての同一性を確認すると同時に、料理の品数によって身分の違いを認識させる。そういう儀式として、共食の場が利用されたことになります。

さらに、平安時代の代表料理である大饗料理が、やがて日本的に発展して、室町時代に本膳料理というスタイルができあがります。これが今日の日本料理の原型といわれているのですが、將軍の御成といつて、將軍の家来が將軍を自宅に招いて、そこで本膳料理の大宴会を催すのです。

三好亭の場合、式三献（食べるのではなく三三九度のように飲むだけ）から始まり、その後から料理が出て、三献まで進んだところで七五三の本膳が出て、その後、四献、五献、六献、七献と続いて、十七献まで出ていますから、一晩かかります。能の番組を一つずつ観ながら、酒を飲み、食べる。そうすると、また次の能が始まる。そういうかたちですから、夕方から始まつて、翌朝七時ぐらひまでかかりますし、じつは権葉の神楽も、三十三番をやりますから、次の朝までかかります。このように夜を徹した宴会が行われて、將軍、および御相伴衆、御供衆、御走衆という、將軍の周りにいる二十数名の連中は、とくに豪華な料理が振る舞われました。それより身分の低い御部屋衆、申次詰衆、御小人衆は、献立の数がずっと減つてしまいます。さらにそれより低い身分の者には本膳だけが出て、それよりも身分の低い者には三の膳までというように、献立の数が全然違います。

しかし、よく見ていくと、棗汁など、必ず同じものが献立のなかに

入っています。これも、部分的には同じものを食べながら、身分によって献立が違うという共食の構造が、身分制社会のなかでうまく利用されている例です。

なおさらに、ここで注目したいのは、將軍の献立をつくった人とそれ以下の身分の献立をつくった料理人が違うという点です。將軍の献立をつくったのは、進士美作守といって、進士流という武家の包丁の流派の料理人です。それより身分の低いほうの献立は小西氏がつくりました。

料理人が違うということは、火が違うということです。身分によって火が分かれるのです。別火・合火という言葉があつて、「おべっか」という言葉もここから来ているという説がありますが、要するに特別扱いするという意味です。身分が高ければ、將軍と同じ合火としての調理になりますが、身分が下がると火が違ってくるというかたちで、火を変えるのです。これも共食の問題です。

この火の問題は、けっこういろいろありまして、一緒に食べるかどうかは、合火と別火というかたちで非常に大きな問題になってきます。日本では「肉を食べると穢れる」という発想がありました。これは「穢れている間は八幡社へお祈りに行ってはならない。身が清浄な間でなければ行つてはいけない」ということで、最も大きな穢れは死の穢れ、二番目は女性の産の穢れ、三番目は食の穢れです。シカとイノシシを食べたら一〇〇日穢れる。その合火は三〇日である。サルは九〇日、タヌキとウサギとトリは一日、魚は三日というかたちで、穢

れ時が違います。

これは神社ごとに全部決まっています、「うちは何日間穢れてるから来てはいけない」ということになります。日光山は、諏訪と並ぶ狩猟の神様ですが、その狩猟の神様でさえ、シカを食べたら二日穢れるとされています。実際に、日光では明治初年まで、シカを神様に捧げていました。この辺は少し矛盾していますが、ともかくそういうかたちで穢れという問題があります。

そのなかに合火・又合火が出てきます。春日社では、シカ・イノシシが五〇日、合火が三〇日、又合火が二一日です。たとえばAという人物がシカの肉を食べてしまったら五〇日間穢れてしまいますから、その間は神社に行つてはいけません。「黙っていればわからないじゃないですか」と言われたことがあります。それは違う。昔の人にとつてみれば、神社で願いがかなうかどうかは大切なことですから、これは厳格に守ります。宮中に出仕する人も、穢れたら宮中に行くことはできません。たたりがあると考えます。

このように、Aが食べたなら、Aは五〇日間穢れます。Aの友だちのBは、Aが穢れている間に合火でAと一緒に食事をすると、Bは肉を食べなくても、Bも穢れます。そのBの穢れは三〇日です。Cは、肉を食べたAとは会ったことも話したこともないけれども、Aに穢れを移されたBと一緒に食事をしたら、Cもまた穢れてしまいます。それは二一日でいいだろうということになるのですが、火で調理したものをともに食べるということは、中世の時代には非常に厳格な意味を持って行われていました。このようなかたちで、同じ火によって調理

したものをもとに食べることの意味の強さ、大きさが重要だったので
す。

最後に、共食の意義と現在についてです。私は長田弘の『食卓一期
一会』という詩集が好きなのですが、この詩集のあとがきにある「食
卓は、ひとが一期一会を共にする場。そういうおもいが、いつもずつ
と胸にある。食卓につくことは、じぶんの人生の席につくこと。ひと
がじぶんの日々にもつ人生のテーブルが、食卓だ。かんがえてみれば、
人生はつまるところ、誰と食卓を共にするかということではないだろ
うか」という言葉は、まさに見事に共食の意義を物語っている文章だ
と思います。

ところが、現代社会では、共食に対して孤食という言葉が盛んに使
われています。昔は、基本的には全部、共食でした。旅に出るとか、
山仕事に行くとか、そういうときには離れた場所で弁当などを食べま
すが、基本的に食事は共同でとるのが原則だったのです。ところが、
現代社会になって、家族間の分業が進み、生活時間が違ってくる、
一緒に食べることができなくなると、分業社会の多様化のなかで現代
社会における個食・孤食が発展してきてしまいました。

そういうなかで、共食と家族という問題がだんだん失われつつあり
ます。これは分業社会の多様化という問題と食の供給システムの問題
があって、お金さえ出せば簡単に、駅前などで朝飯をとることができます
ますし、コンビニで弁当を買ってきて、自分で食べることができます。
このように現代社会においては、共食という、人間の集団的なきずな

を示す機会が、家族のなかでも失われているということを申し上げて、
私の拙い話を終わらせていただきます。ご清聴、どうもありがとうございます。
ございました。